

ノリで後ろを使い始めたノンケ君が、 シェアハウスの住民とやりまくったせいで 後ろでイカないと満足できない身体になっ てしまう話

体験版

攻め1 クールねちっこい年上 薬剤師 樋上（ひがみ）

攻め2 ノリ軽めイケイケ同い年 アパレルショップ店員 小水（こみず）

受け 後ろの才能開花受け 書店員 有栖（ありす）

要素：3P、乳首責め、前立腺責め、受けフェラ、攻めフェラ、2輪挿し、結腸責め、焦らし、連続絶頂

物価高に追い打ちをかけるように、家賃までもが高騰する昨今。社会人とはいえ稼ぎが知れている俺は、固定費を抑えるためにシェアハウスに住むことにした。ただ、家賃自体は安いものの、共同生活ならではのルールはもちろんある。騒音に気を付けるとか、冷蔵庫の私物には名前を書くとか、様々だ。その中で一番き

ついののは、緊急時を除いて、入居者以外は立ち入り禁止というルール。この決まりのせいで、住民全員が友達も恋人も呼ぶことはできない。いっそシェアハウス内で楽しめればいいが、あいにく住民は男限定のため、華のある生活は営めない。それを残念に思うのは俺だけではなく、同い年の小水も一緒だった。

「あーあ！潤いが無い！マジで制約厳しい〜」

「どうせ潤っても、風俗行っただけじゃん小水の場合」

「はあ〜！？俺がハマってんのはメンエスです〜、ぎり風俗じゃないです〜。枯れ切った有栖君とは違います〜」

「枯れてない！俺だってせめて恋人作ってしちゃつきたいと思う！」

女性を連れ込みにくい環境というのは、20代前半の俺たちの性生活に大きな障壁を生む。書店員で地味な俺はともかく、アパレルショップで働いて見た目もお洒落な陽キャの小水ですら彼女がいないのだから、シェアハウスの制限が重くのしかかっているのは間違いなかった。

だからこうして口げんかで憂さ晴らししていたわけだが、リビングで揉める俺たちを、風呂上がりの年長者が止めに入った。

「おい、夜中に騒ぐな。ただでさえむさくるしいのに」

「「いでっ」」

丸めたバスタオルで俺らをひっぱたいて黙らせる彼は、俺たちより4つ年上の樋上さんだ。比較的落ち着いていて口数も多いけれど、意外と手は出る。冷静

だけど怒らせると怖いタイプだ。ただし彼にビビっているのは俺だけで、小水はスキンシップのひとつくらいにとらえている。年上から叩かれてもへらへらしてられるメンタルの強さが俺にも欲しい。

「騒いでないっすよ～。やりたい盛りにエッチできないのしんどーって話してただけなんで」

「すればいいだろ、外で」

「だって家に連れ込めないんすよ！？ハードル上がっちゃうじゃないっすか」

「連れ込んだところで、ユニットバスの6畳ワンルームだったらドン引きだろ。マイナスだけ考えるな。酒でも飲んで忘れろ」

「えっ、マジすか！？じゃあ遠慮なくごちになりま～す」

「有栖も飲むか？」

「お、俺もいいんすか」

「小水にだけ良い思いさせるわけにはいかないだろ」

「じゃあ、俺もいただきます！」

でもシェアハウスの良い点も当然ある。こうして何かあったら、年の近い男同士ですぐに飲み会が開催できるのは最高だ。友達づくりが上手くない俺でも寂しくはないし、なんやかんや彼女とかいなくてもいいんじゃないか、と思ってしまう。これが性生活を枯れさせているもう一つの要因な気もするが、今の楽しさを振り切って恋人作りに勤しむほど、俺は恋愛脳じゃなかった。

そして酒が進むと、つつい話題は猥談になる。これは男同士、逃げられない性みたいなものだった。

「ってか、有栖って風俗もいかないし、マチアプもしてねぇじゃん。それで寂しくなんねーの？男として」

「そりゃあ、ある程度思うけど…。積極的に行く俺は、あんまり想像できないな」

「別に有栖が枯れてるわけじゃないだろ。今時生涯独身も多いし。ただ、このシェアハウスのルールがあるせいで、男として寂しいのは分かる」

「っすよね～！てかもう、こうなったら入居者同士でやったらよくねー？」

しかし、この小水の発言で場の空気が変わった。それに、俺は一瞬おや、と思う。こういう時に悪い流れを切ってくれるのは、年長者の樋上さんだ。だから、とんでも発言をした小水になんか言ってやってくれよという期待をこめて彼に視線を送ったのだが、俺の思いは届かなかった。

「いいい、いやいや、やるとして入れる穴ねーよ。ねぇ樋上さん？」

「一応できるぞ、男同士でも」

「そうだぞ有栖！男はケツに入れんだよ！お前にも穴あるだろ！」

「そっ、それはそうだけど！そもそもチンコ入れるためについてるわけじゃないだろ」

「まあ確かに。可能か不可能かは別にして、入れんのも入れられんのも俺は無理だ」

「え～？樋上さん、もしかしてビビってんの？実は不能なの？その年でインポなんすか？」

「ああ？誰に言ってんだ？」

しかも恐ろしいことに、小水の煽りに樋上さんがのっかっている。普段の彼ならバカを言うなと一蹴できるのに、酒のせいでお互いおかしくなっているようだ。なんだかよろしくない雰囲気だ。おいおい、マジか。これ、マジでやる流れなんじゃないのかと俺が双方を交互に見たところで、小水の右手が高く上がった。

「よっしゃ！じゃあジャン負けが今日の女役な！」

「絶対に負けない」

「お、おい待て、俺はまだやるとは」

「最初はグー！」

だが、人とは難儀なもので、例の掛け声を言われると握りこぶしを作ってしまうように習慣づいている。半分条件反射で手を出し、俺はそのままグーを出した。そして彼らは、パーを出している。

「...え？あれ、俺」

「よし、じゃあ今日の女役は有栖な」

「どこでやるんだ？ここですか？」

「いや～、流石にリビングはきつくはないっすか？有栖の部屋でいいっしょ」

「よ、よくないだろ、なんで俺がやられるのに、俺の部屋で」

「自分が落ち着く場所のほうが良くね？」

「ほら、何してる。ボケッとしてないで行くぞ」

「樋上さんは味方じゃないんすか！？」

そして気が合うときは気が合う彼らは、素早く俺を自室に連行して、あれよあれよと言う間に犯してきた。最悪だ、じゃんけんの神様は俺を見放したとさめざめ泣いたが、ここで新たに発生した問題が一点。

なんせ、良かった。彼らから交互にハメられるのが、意外にもハチャメチャに良かったのだ。俺は運の神様にはフラれたが、セックスの神様には愛されていた。その日の快感が忘れられなかった俺は、2回目は自分から2人を誘った。同じようにリビングで酒を飲んでいる時、酔った勢いで「また3人でやりたいって言ったら引く？」とふっかけてみたら、樋上さんも小水もけっこうノリノリで抱いてくれた。以来、俺たちの間では、定期的に3人での公認セックスが行われている。こうして枯れた性生活への解決策を見出した俺たちは、シェアハウスのルールに則ったうえで、自給自足セックスライフを謳歌することになった。



「はう、ッ、ん、ん」

「別に声押さえなくていいじゃん有栖」

「うるさ、い、も、早くイカせろ、樋上さん帰ってくる前にっ...！」

「でも有栖は、ちょっとスリルある時の方が感じやすい気がする」

「ひんううっ！！」

今日は3人で決めた約束の日。突発的にするとなると全員の予定が合わないこともあるので、3人でするならある程度事前に調整がいる。だからその日に向けてお互いに準備があるわけだが、我慢できなかった俺は、一足先に風呂場で内部洗浄を兼ねたオナニーをしていた。だが運の神様に見放されている俺は、あえなく自慰現場を小水に発見されてしまう。

本来は最も帰りが遅い樋上さんを、俺たち後輩組は待たなければいけない。でもやりたい盛りがその気で今日を待っていたわけだから、止められない時もある。というわけで、風呂場から俺の部屋に移動して、広げた穴に小水の熱をねじ込まれた。しっかり広げておいた場所は、彼の自身を受け入れて、ひくひくと収縮する。自分では得られない快感にすっかり流された俺は、最初のうちは気持ちいいばかりで終わっていた。けれども夢中でセックスをしている間に、思ったよりも樋上さんの帰宅時間が迫っていたので、さっさとしろと小水を急かすことになった。

「どうする？樋上さんに先にしてんのバレたら。あの人意外とキレやすいし、有栖いじめられるかもな～」

「っや、あ、な、なんで俺だけっ」

「だって俺にキレるより、有栖のこといじめた方が面白いじゃん？」

「んんっ、んゝ ～～～っっ！！」

けれどまだイク気配のない小水に発破をかけたものの、怒られても平気な彼は焦ることなど全くなかった。むしろ余裕があるくらいで、ぐうっと俺の腰を自分の方に引いて、下半身を強く密着させてくる。奥のところがグリグリと刺激されると、俺ものけ反るほどに気持ち良かった。

「ほら、やっぱ有栖ってちょっとキツめに責めた方が嬉しそうにしてる。いじめられて気持ちよくなってんだろ」

「う、あ、あ...ッ！やっ、そ、んな、ことっ」

「嘘ばかり」

「あああっ！！」

ふふん、と得意げに笑う小水は、俺がかぶりをふっても関係ない。むしろ俺をエロく育てた一人でもあるから、俺よりも俺の性癖に関して詳しいくらいだ。だから膝を思い切り曲げられて、まんぐり返しのようには下半身を折りたたまれると、抵抗しづらくなっただけで深い場所に熱を打ち込まれた。俺がこうして言いなりにされて犯されるのが好きなことを、小水は知っている。

「ん、あ、あ、あ、っう、あ、ああああっ！っひ、〜〜〜ッっんんん！！」

「はあ、すっご、ヤバい、有栖エロすぎ...！」

「ふ、ッ、ん、小水、小水、これ好きっ、好きい...っ！」

「知ってる。分かっててしてる」

「んゝ〜〜〜〜〜っ！！」

苦しい体勢のまま、強引に犯されるのがたまらない。本来男だったら逆の立場になるはずなのに、今の俺は抱かれる専門だから、無理矢理組み敷かれる側になっている。でも動けない代わりに、腹の奥を擦られる気持ちよさを味わえる。この快感を知ってしまったら、やっぱり普通には戻れないと、小水ともっと密着するために彼の首に腕を回した。

「あゝッ、あ、っ、イキ、そ、これ、中でえ...っ！」

「ん、俺も、そろそろ出そうっ...！」

「あう、う、んっ、イク、イク、あ、ああああ...ツッ！！っく、うううゝんっっ！！！」

とことん深くでイキたかった俺は、ぐうっと小水の熱が侵入してきたとき、頭も後ろも大満足だった。奥深くを抉られる快感に、バチンと身体に電気が走る。そのまま全身を痙攣させて、後ろで激しく絶頂した。

ちなみにドライでイッた時は、中の締め付けが段違いらしい。なので俺の中で、小水もイッていた。一応ゴムは付けていたから、イッた後の処理はお互いに楽だ。

ただし、事後の余韻に浸る時間はない。先に始めていたことは、なるべく樋上さんには隠しておきたい事実だ。だから俺にもたれてくる小水の事を膝で軽く叩きながら、証拠を隠滅するよう急かす。

「あ〜...、ひっさしぶりに出した。オナ禁してたからマジ最高」

「そう、かよ...。つか、出したなら抜け、そろそろ樋上さんが帰って——」

「残念だがもう帰ってる」

けれども最速で処理をして誤魔化そうとしたが、バレては面倒な相手は既に帰宅していた。途中でドアが開いていたことに、全く気が付かなかった。俺の部屋のドア付近には、腕を組んでこちらを見る樋上さんが立っている。着替えはまだしていないのかスーツ姿だけれど、普段着ではないからこそその威圧感があった。言い訳のしようもないほどみっともない格好でいる俺たちを見て、彼はため息をついた。早く抜けと小水を蹴って謝罪を促すが、残念ながら彼の辞書に誠意の文字はない。

「お前ら…。何勝手に始めてんだ？」

「おかえり樋上さん。お先で～す」

「おおおお、お前っ、小水お前っ、もっと他に言い方が」

「ノリノリでイクイク言ってたのも聞いてんぞ、有栖」

しかしながら、謝ったところで先走った事実はなくなる。不機嫌そうに舌打ちした樋上さんは、じろりと俺たちを睨みつけながらベッドへと近づいてくる。

「つか、何勝手にヤッてんだよ。夜に3Pの約束だったろうが」

「ごめ～ん樋上さん。だって有栖が裸で誘ってくるから、俺も困っちゃって」

「はあ？それはルール違反じゃないのか、有栖」

「ち、違いますよ！あれはそういうのじゃ」

「え～？　どうかな？　あんな喘ぎながらケツ弄ってたのに、誘ってなかったって？」

「っ…！」

更には、どう考えても風呂場で襲われた俺が被害者だったはずなのに、小水のせいで俺が悪者になってしまう。いや、誤解だ。俺はただ準備をしていただけ。オナってはいたし、多少声は出ていたけれど、誘ってはいない。あくまで俺に手を出したのは小水の独断だ。

とはいえ、冷たい視線を受けながら事の真相を話せるほど、俺には度胸がない。なのでひゅんと小さくなって、何も言えずにうつむいてしまう。

だが、肝っ玉の小さい俺とは違って、小水はキレている樋上さんを相手にしてもノーダメージだ。なので彼は平然と俺の背後に回って、体育座りで固まる俺の足を開き始めた。

「まあまあ樋上さん。そんな怒らないでくださいよ。有栖もビビっちゃうしさ。てかほら、ココ見てくださいよ？　ちゃんと樋上さんが入れやすいようにしといたんで、いつでもハメられますよ～？」

「っ、やっ…！！？」

樋上さんに見せつけるように開かれた足の間に、小水の手が伸びてくる。そしてそのまま、さっきまで小水を入れていた穴を広げられた。くぱ、と開かれる場所は、ローションの名残があるから、照明を反射してぬらぬらと光っているはずだ。それを凝視する樋上さんの視線が嫌で、俺は咄嗟に足を閉じようとした。で

も、小水が俺の膝の上に自分の足を乗せて、足が閉じられないようブロックしてくる。

「ちょ、やだ、小水っ！」

「なんだよ、さっきまでバチバチにハメられて喜んでたくせに、なに恥ずかしがってんの？」

「バチバチにハメてた孔なら、入れやすくなったっていうより、単に緩くなっただけなんじゃないのか？」

「さぁ～？その辺は個人差あるっすよ。樋上さんも入れて確かめてみないと」

「や、やめろ、そんな広げるな...っ！や、ちょ、樋上さんまで」

くに、くに、と孔の両端に指を置いて、開閉させてくるのが本当に恥ずかしかった。嫌だ、いちいち見せつけるなと首を振りながら、背後の小水を肘で叩く。けれどちゃっかりノッてきた樋上さんも、ジャケットを脱いでワイシャツの袖をまくっている。何なら、小水から渡されたローションを手にとって、手のひらの上で温めている。

「まっ、樋上さん、俺、まだ」

「小水はよくて、俺がダメな理由はないだろう」

「ち、ちがっ、そうじゃなくて」

「中に出してはないんだよな？」

「そりゃもちろん。ちゃんとゴム付けてヤったんで」

「ならいい」

「ッ、んんんんうっ！」

そして温めた液体を孔の上に落としてから、樋上さんは俺の中に指を一本入れてくる。

ちなみに俺が焦っていたのは、樋上さんに入れられたくないからではなく、中イキ直後の敏感な状態で弄られたくなかったからだ。でもおそらく、俺たちの情事を見ていたんだから、樋上さんも分かったうえで弄っている。なぜなら小水と同じように、樋上さんも俺のことを俺より熟知している一人だからだ。きっと俺の反応を見れば、感じやすくなっていることもすぐにバレてしまうだろう。

実際、ぬちぬちと入り込んできた指が前立腺を引っかいたとき、ビクンと大きく背をしならせた俺を見て、樋上さんは軽く口の端を上げていた。

「んあ、あああああううう...ッッ！！」

「随分感じやすいな、有栖。小水とはそんなに派手にしてたのか？」

「別にサクッと一回しただけですけど〜。有栖はほら、ちょろいからすぐに後ろイキしちゃうんで」

「くふ、う、ッあ！はひう、んんっ、あ、や、やうっ！！」

焦ってばかりの俺と違って、樋上さんは冷静だ。だから俺の様子を見ながら、感じやすい責め方を探している。くにくにくと指先で前立腺を押した後、もう一本指を増やして、交互に引っかいては、ゆっくり前後に擦ったりもする。そこで俺が悶えるのを確認したら、あえてスローに出し入れして、もがく俺の姿を楽しんでいた。

それに、注意すべきなのは樋上さんだけじゃない。俺の後ろにいる小水も忘れてはいけない。彼は彼で、しれっと俺の乳首に手を伸ばして、くにとつまんだりしてきた。ふざけるな、お前は大人しくしていろと思ったけれど、薬指と親指でつままれた乳首の先を、中指と人差し指でくすぐられるのが気持ちよすぎで、思わず喉が詰まった。

「はふっ...！ッ、く、うう、あ、あああっ...！！」

「思いっきりイッたのに、その後焦らされんのキツそ〜」

「ひぐ、うう、ッ、あ、樋上、さ、も、入れて、早く入れて...っ！」

「入れてもらったんだろ、小水に」

「そう、ですけど...！ん、んんッ、っ、でもお...っ！」

「小水と違って、いつでもどこでも出来るほど俺は整ってないからな。その気になるまで時間がかかる」

「ひいいいっっ！！？」

そして樋上さんは樋上さんで、怒りを持続させているらしい。だから本当は、スラックスの下で張り詰めたそれを入れられるはずなのに、おあずけを余儀なくされた。

しかも、怒っている樋上さんはけっこうねちっこい。だから手マンだけでなく、身体をかがめた彼からアナルを舐められて、足全体がゾクゾクした。まずい、指と舌でいじめられんの気持ちよすぎると、俺は急いで足を閉じようとした。なのに今度は、小水が手も使って足を開いてきたから、より一層足は開きっぱなしになった。

「んんっ、んんんっ！！っや、あう、だめ、それ、あ、ああっ！！」

「あーあ、これは長いよ～、有栖。樋上さん怒ると焦らすタイプだから。先に謝っておいた方がいいんじゃない？」

「～～～っ...！」

ちゅく、ちゅくりと舌で孔の周りを舐められてから、ゆっくりといい場所を擦られると、下半身がドロドロになりそうなほどよかった。これを続けられたらイッてしまいそうだと分かったから、俺も暴れたかったけれど、後ろの裏切り者のせいでそれもできない。

なんで俺だけが謝らなきゃいけないんだ。お前も同罪だろうと小水を睨んだけれど、ぐううっと前立腺を押されてそれどころじゃなくなった。

マズい。樋上さんは、キレると本当に容赦がない。そういう意味では、テンションが一定の小水の方がまだ優しさがある。これはよくない、本気でさっさと謝ったほうがよさそうだと、俺は樋上さんの手を握って謝罪する。

「ひうッ、あ、あ、ごめ、なさっ...！小水と先に、エッチして、ごめんなさ、あ、ああっ...！」

「そんなに足ビクつかせて、何がごめんだよ」

「や、まっ、それ気持ちいいからっ！気持ちよすぎてイッちゃうからあああ...ッッ！！」

けれど謝ったところで、樋上さんの手つきは意地悪なままだった。3本に増えた指が、しつこく前立腺を擦っている。キツイ、今前立腺への集中攻撃は絶対に耐えられないと、俺は愛撫を止めるために彼の手を強く握った。でも広がる孔の縁を舐められると、ゾワゾワして力が抜けてしまう。

「んあ、あゝっ、ま、って、もう、もう...っ！！っひ、イク、イクイク、うう、んゝ ～～～～ッッッ！！」

きゅん、きゅん、と後ろが疼いて、どうしようもなくなっていた。舌も指も気持ちいい。感じやすい場所を的確に捉えられて、逃げ場がない。なのに身体も動かせない。もうだめだ、イク、こんなのイクに決まってる、俺は不自由な身体を反らしながら2度目のドライオーガズムに至った。

「ッ、ッ、んんゝ ...っ！はあっ、はあ、あ、っ、え、や、あ、あ、あうっ！！？」

ただ、イッたら一区切りかと思っていたのに、樋上さんの手は止まらなかった。にゅりにゅりと震える前立腺を揉みこまれて、ただでさえ妙な方向に反った身体が、更に反り返る。

何をしてるんだ、俺がイッたことくらいは樋上さんだって分かるだろうと、非難するように彼を見た。でも俺の視線を受けた樋上さんは、俺と目を合わせた後、わざと見せつけるように俺の熱をねっとりと舐め上げてくる。下からゆったりと進む肉厚な舌の感触に、じゅわっと先走りが滲むのを感じた。

「くは、あ、あああううう...ッッ！！ひ、ッ、な、んでっ、も、イッた、イッたのにいっ！！」

「イッたからなんだ？止めてやるとは言ってない」

「やあっ！もうキツいっ！んくっ、うう、だめ、もうだめっ」

「おいおい有栖～？ジタバタすんなよ？元はと言えば、お前が俺を誘ったせいなんだからさ」

「ッ！！??」

気持ちいいところに、気持ちいい追い打ちをかけられるのが嫌で、俺はせめて自由がある両手で樋上さんを止めようとした。これで頭ぐらいは好きに動かせなくなるはずと、彼の頭部を固定しようと暴れる。けれど俺の両手は、背後から伸びてきた手に掴まれてしまった。そのまま耳の横に固定されて動かせなくなる。

「なっ、何すんだよ小水、離せよっ！」

「だって有栖、樋上さんの邪魔しようとするじゃん。ほらほら樋上さん、有栖は俺が押さえとくんで。いい機会だからちゃんと教え込んでくださいよ。樋上さんに内緒で、勝手にエロいことしたらどうなるかって」

「ちがっ、あれはお前、が、あ、あああ.....ッッ！！？」

足は元々小水の足で邪魔をされて閉じられないから、手を掴まれたことで、俺は四肢の自由を全て奪われたことになる。普段なら小水とはそこまで体格差がない俺にも勝ち目はあるけれど、2回もイッた俺では振りほどけない。まずい、これ

じゃ一方的に気持ちよくさせられてしまうと慌てたけれど、樋上さんの口に熱が飲み込まれていったので、ビキッと身体が突っ張って終わった。

ドライで2度イッたものの、出すものは出せていないそこを舐められるのはあまりにも気持ちよすぎた。溶ける、すぐにイクと、足が震え始める。なのに追加で、前立腺も責められる。くにくにと甘く押される場所が、俺の腹の奥に快感を送り込み続けている。

「あああああっ！ううっ、だめ、イクっ、イクううっ！！」

「樋上さんに舐められるの好きだよなあ有栖。いつでも5分も持たないし。そんなに良いんだったら俺も舐めてほし～」

「お前は無理」

「え～？差別なんですけど。有栖のチンコ舐めれんなら、俺のも舐めれんじゃんね？」

「んゝ ～～～～ッッ！！ンンううんっ！！っひ、っ、ああうっ、うゝ ～～ッッ！！？」

「あれ、有栖もしかしてもうイッた？出したのに終わってもらえてないんだ？」

「はひうっ！！ッぎ、ああ、あ、あっ、ううううンンゝ っっ！！や、先、先ダメ、今そこ舐められんのキツいいいいいっっ！！！！」

もしもどちらか片方とだけしているなら、快感の増え方も2分の1に減ると思う。でも、2人から同時に責められると、一人では受け止めきれないほどの快感を与えられることもある。例えば今みたいに、イッた直後でも暴れることすら許されず、より強い責め方で愛撫される時がいい例だ。

小水が軽口を叩いた腹いせに、まずは一度樋上さんからイカされた。びゅっと彼の口内に精液を放って、自由の少ない下半身を揺らす。でも射精してもフェラが終わりになることはなく、ぐっ、ぐっと吸い上げられた後、ネロネロと亀頭の部分だけを念入りに舐められた。敏感になる時間に、過敏になった部位を責められて、俺は目を見開いて叫んだ。叫ばなければ無理なくらいの快感だった。当然、逃げたくもなった。

だけど、逃げられない。身体は小水に押さえられている。後ろに腰を引きたくても、それも無理だ。ひどい、こんなのまたイク、無限にイカされると、首を千切れんばかりに振った。なのに双方手を緩めてはくれなくて、俺は2人の間に挟み込まれて、立て続けに次の精液を放っていた。

「いやああああっ！！ああああダメダメダメっ！！ま、た、またッ、っあ、あんんうううっ！！」

「ううわ、足ガックガクなのに止めてもらえなくてやばそ〜。イキまくり？ずっとイッてんの？」

「んんゝッ！あ、ああ、も、や、イグ、の、もおいしいゝいゝいいっ！！」

「でもな〜、樋上さんまだ怒ってそうだしな〜。止めてほしいなら有栖が誠意見せるしかないんじゃない？」

「あう、ッ、ごえ、なさっ、も、許しっ、ッん、ンンンうっ！！？やあっ！中、中も一緒、はあ...っ！！んあああああやだやだやだっ！！全部イクッ！！イグっ、ッ、————っあああああ！！！！」

連続での射精はただでさえキツいのにも、樋上さんはそれだけでは許してくれずに、継続的に前立腺も責めてきた。射精が無理そうと思ったらドライでイカせる方に切り替えて、俺が油断したら前を責める。信じられない、何回イカせたら気が済むんだよと暴れまわりたいのに、手も足も動かせない。こんなの死ぬ、イキ過ぎて死ぬと、俺は泣きながら謝ったけれど、それはもうじっくり、たっぷりイカされまくった。

「ひうぁ、ぁぁ、あ、あ、あゝっ...！」

「お〜、全身ビクついてる。やっぱ樋上さんってエグすぎ」

「明らかに加害者のくせに、有栖に全部の罪押し付けてるお前の方がエグいだろ」

「ここまでやってそれ言います？俺はまだぬるい方でしょ、普通に」

「んやうっ」

ある程度俺をいじめると、樋上さんは満足したのか、ようやく口を離してくれた。指も抜けていったので、俺に快感を与えていたものがなくなる。小水の拘束も外れて、身体に自由が戻ってきた。でも悪戯半分に小水が乳首を弄ってきたので、振り返りながら背後の彼をたしなめる。

「くぅ、ッ、や、めろ...！今、乳首だけでも、きついから...っ！」

「やめろって俺に言うけどさぁ？いいの？そんな油断ぶっこいて」

「え...？ッ、あ、あうううっ！！？」

けれど、俺がもっと注意すべきなのは前にいる人物だった。意識がそれたところにブチ込まれたせいで、一瞬で高みにつれていかれる。さくっといい場所を貫かれたのも良くない。ただでさえイカされまくって中イキが癖づいたのに、前立腺を刺激されたらどうしようもなかった。

「んんあああゝ ああ...ッ！！はああ、あ、あああっ！」

「ううわ、イキまくりだったから気持ちよさそ。よかったね有栖、念願かなってハメてもらえて」

「く、ひっ、んっ、んんっ」

「でもせっかくだから、こっちでも気持ちよくなろうね」

「ああああ！！？」

ただし中イキして俺が半分意識を飛ばしていたところで、情けや容赦をかける2人じゃない。こういう時には連携の上手い彼らは、片方は軽く腰を揺すって絶頂を継続させるし、もう片方は俺の熱を扱って前からも快感を送り込んでくる。嘘だろ、どっちでもイカせるって鬼かよと身をよじってみても、男2人に挟まれた身体は上手く動いてくれない。

「いあああっ！！だ、め、これ、イク、イク、も、あ、あうんっ！！」

「っ、はあ、めちゃくちゃ締まる...！相変わらず女よりいい」

「ね～、有栖の中ってマジ最高。有栖も樋上さんのチンコ気持ちいいもんね？」

「んああ、あ、ッッ！！はひう、ッ、あゝ、そこだめ、今そこグリグリッ、しちゃ、っ、んんううんっ！！」

「でも俺の手も気持ちいいっしょ？」

「ひぐううんっ！！」

太い熱から圧迫された前立腺を、しつこく擦られる刺激もキツイ。それなのに、前を素早く扱かれるのも苦しい。こんなの我慢できないと身体がいきんだら、びゅっと自身から精液が飛んでいた。

「あふぁ...ッ！っ、っ...！！」

「お～出た出た。派手にイッたね」

「どっちでイッたんだ、今のは」

「さぁ？手コキしてるし俺じゃないっすか？」

「そうだって証拠は？」

「え～？樋上さんいちいち気にすんのめんどいって。てか、俺が仕上げといた孔にぶっこんでんだから、これ以上文句言わないでくれます？」

「最後に仕上げたのは俺だけだな」

「あううううゝ...っっ！！??」

ただ、無残にイカされただけでは俺の不幸は終わらない。イッた後に軽く口論する2人の様子からして、射精後の余韻に浸らせてくれるのかと思いきや、全然そうではなかったからだ。小水から手を出されたことに納得がいかなかったのか、樋上さんはより一層深く、俺の中に自身を埋めてくる。後ろ側を小水に支えられていて逃げられない俺は、腰を逃がすことも出来ずに、ただただ奥まで抉られた。

ぐぼ、と最奥の扉が開かれる感覚に、思わずのけぞって目を見開く。開いた口から舌が出て、かふ、と少し苦しい息が漏れた。けれど身体の内側をずんっと小突かれると、今度は獣じみた喘ぎ声が出始める。

「んんんううん`ンッ！！っは、あ、あ`あ、やあっ、深いッ！そこ、そこ無理、無理無理無理ッ！！」

「暴れんな有栖」

「そうだぞ有栖。せっかく樋上さんが、お前のこと気持ちよくしてくれてんだから」

「〜〜っ！！ッああ、あっ、ッううんっ！！！」

ガクン、ガクンと身体が揺れて、強い快感から逃げようと無意識に腰が引ける。けれど俺の腰は樋上さんに抱えられるし、せめて両手で抗おうと思ったら、次は乳首にも小水の手が伸びてくるしで、もはやどこからの刺激を妨害したらいいのかも分からない。

手っ取り早く掴めそうな小水の手を握っても、カリカリカリと乳首を引っかかれて、なぜか連携プレーで樋上さんがローションを垂らしたりする。さっきまで言い争っていたくせに、どうしてここぞという時にアンタ達は気が合うんだと、苛立って足が出そうになった。ただし一瞬宙に浮いた足は、ぐりぐりと奥をかき混ぜられたせいで、ビクンとつま先まで伸びきって使い物にならなくなる。

「はううっ！っく、うう、あ、や、乳首だめ、だめ...っ！」

「有栖、乳首もモロ感だもんな〜。いやでも、前より感度上がったかも？」

「お前が散々弄るからな」

「だってほら、見てくださいよ。俺がちょっと触っただけでビクビクしてるんすよ？そりゃかわいがってやろうかって気にもなるでしょ」

「っふ、んんっ、っや、あ、も、イク、乳首、でえ...っ！」

「へえ～、とうとう有栖、乳首イキもできるようになった？いいじゃんいいじゃん、見せて？」

「はふっ、ッ、あ、あゝ...ッッ！ん、んゝ～～～っっ！！」

くにくに、すりすり乳首を触られるうちに、腰一帯がゾワゾワし始めた。ああ、これはよくない、これ以上触られたらイッてしまう。嫌だ、確かに乳首は前より感じやすくなったけれど、乳首でイクのは嫌だと首を振ったら、なぜか中にいる樋上さんが動きを止めてしまった。

最悪だ、いっそ奥を擦ってくれたら、そっちでイッたと言い訳できるのに。それも許してくれないのかと樋上さんを見たら、きゅうう、と強めに乳首がつねられる。ひくん、と喉を反らした時、みっともなく中を強く締め付けたのは、きっと彼にも伝わただろう。

「ンはああああああ.....っ！！は、あっ...！ひ、う、う、うう...！」

「本当に胸だけでイクとは。やらしくなったな、有栖」

「ふう、う、うっ...！」

「何今更恥ずかしがってんだ。顔なんか隠したって、俺らにエロいところ全部見られてるんだから意味ないぞ」

「ッやあああああ...！」

乳首でイッたあと、あえて2人が俺をまじまじと見ているのが分かって、俺は両手で顔を覆った。なのに俺の心を見透かした樋上さんは、余計に俺を辱めることを言う。ひどい。そんな風に言わなくなっていいじゃないかと泣きたくなった。でも、たしなめるように俺の熱の先端を爪の先でカリカリと弄られると、反論の言葉も出てこなくなる。

ー続きは本編にてお楽しみくださいー